

## アスペクト再考

高橋隆雄

この小論は、本論叢に前回書いた「アスペクトと意味」の続篇というよりもむしろそれへの反省を主眼として書かれている。それゆえ本来ならば、そこでの叙述を検討し、しかるべき批判をするのが筋道なのだが、その批判すべき点についての確と思われる指摘をしている論文が最近書かれたので（『…』として見る）の文法」、野矢茂樹、「理想」一九八六年一月号）重複を避ける意味もこめて、ここではそれを省くことにする。

つまり、本稿では「として見る」という表現の用いられる状況（特に主語が一人称の場合）ないし「アスペクト（相貌）を見る」という表現の用いられる場面と、「熟知」したものを見る場面とが両立しがたいこと、それゆえ、「見る」とは一般に「何かとして見る」ことであるという説は、ヴァイトゲンシュタインの用いた「として見る」の語法を誤解していること、彼は「として見る」という表現の考察で知覚の理論負荷性や、熟知性の体験における類型把握といったことを主張しようとしていたわけではないこと（もちろん、否定しようとしたのでもない）、こうした重要な論点を前提して話をすすめようと思う。さらに拙稿「アスペクトと意味」において述べたこともなるべく繰り返し返さないことにする。問題となっている「として見る」という表現や「アスペクト（相貌、見え）」について論じられている「哲学探究」第二部第十一節の難解さは多くの人によって指摘されている。そこでは多くの関連した事柄が錯綜しており、また扱っ

ている問題そのものの複雑さ微妙さもそれに加わり、全体を展望することはきわめて難しいと言わざるをえない。本稿ではそこで扱われているいくつかの主題の中の二つの重要なテーマであるところの、「アスペクトの知覚」と「体験・感じとしての意味」について考えてみたい。これら二つのテーマの関連については、「アスペクト盲」と「意味盲」(『哲学探究』ではこの後者の言葉自体は用いられていないが)との関係の指摘がそこでなされているし、他の多くの箇所でもそれについて触れられている。その一つを挙げてみよう。

「体験されるものとしての意味」という問題は、ある図形をかかくのものとして見たり、しかしかのものとして見たりするという問題に類似している。われわれはこうした概念上の親近性を記述しなければならぬ。どちらの場合にももともと同じことが問題になっているのだとわれわれは主張しない(R.P. Torg)。(傍点原文による。以下同。)

両者の「類似」を「比喩」に関するヴィトゲンシュタインの叙述を手掛かりとしつつ考察するのが本稿の目的である。つまり、「用法としての意味」と「体験されるものとしての意味」の関係と、「熟知の場面における知覚」と「アスペクトの知覚」の関係とを、ともに「言葉の通常の表現」と「(広いイミでの)比喩的な表現」との関係と類比的にとらえることで、両者の類似性を把握したのである。そしてそれと同時に、前二者の関係における微妙な相違を示すことをもめざしている。

アスペクトの知覚が比喩的表現と関係をもっていることは例えば次の引用にあらわれている。

「人間はしばしば母音で色を連想する。あるひとにとって、ある母音は、それがたびたび相前後して発音されると、その色を変える、といったことがありえよう。aはそのひとにとっては、例えばへいまは青——いまは赤」である。

「わたくしはそれをいま……として見ている」という表現は、われわれにとって「aはわたくしにとっていま赤だ」という表現以上のことを意味していないことがありえよう(PU. II-x)。」

体験されるものとしての意味と比喩の關係を示す段落を引用してみると、

「わたくしが表情豊かな読書をしているときにこの語を発音すると、それは完全にその意味 (Bedeutung) によって充たされている。——『意味が語の用法 (Gebrauch) だとすれば、そのようなことがどうしてありうるのか。』ところで、わたくしの表現は像的に (bildlich) に言われたのである。しかし、わたくしがその像 (Bild) を選んだわけではなく、それがわたくしに迫ってきたのである。——だが、語の像的な使用法は、むしろそのもとの使用法と衝突することなどありえない (Pu. II-x)。」

「母音 a はわたくしにとって赤い」といった表現が、ともかく通常の使用法を逸脱した表現の仕方であることは確かである。もちろん、通常の使用法と逸脱したそれとの間に明確な境界線を引くことは一般的にはできないが、右の表現については逸脱ということを確認してかまわないだろう。また、「体験されるものとしての意味」ないしそれに類する表現は、像的に用いられており、もともとの使用法と対比されていることからわかるように、「意味」の本来の意味で用いられてはいない。これらの表現を、広いイミでの「比喩的表現」と呼んでさしつかえないと思われる。そのことについてはこれから考察する。また、「広いイミでの」という限定を加えたのは、ヴィトゲンシュタインは、普通に「比喩」と訳される、Gleichnis<sup>1)</sup> については、いま挙げた二つの表現と明確に一線を画そうとしているように思われるからである。

ヴィトゲンシュタインが比喩について何らかの理論をつくらうとしたとは思われぬし、それについて触れている箇所も多くない。なかには明らかに矛盾する言いまわしさえ遺稿中には含まれている。そのような事情ではあるが、比喩の問題は、アスペクトの問題を読み解く一つの鍵であるように思われるので、ここで彼が比喩について考えていたこと

を、本稿の課題と関連するかぎりにおいて考察してみることにする。

まず、確かだと思えるのは比喩とはヴァイトゲンシュタインにおいても通常の用法、標準的用法を前提した上でのそれからの逸脱<sup>43)</sup>をもって特徴づけられるということである。また、逸脱した用い方が定着して標準的な用い方になったり、標準的なもののうちのあるものが殆ど使われなくなり忘れられていくというように、標準的と逸脱的という区別も相対的なものでしかない<sup>44)</sup>とヴァイトゲンシュタインも当然考えていた。そのようなわけであるから、日常の言語はいわば比喩的用法に満ちているのである。

ある時点に関して相対的であるとは言え、一応の標準的用法と呼ばれる使用法がある。その使用法を前提として、通常の仕方でも表現できる内容を、多くの場合、あえて意識的に逸脱した仕方<sup>45)</sup>で表現する、これをヴァイトゲンシュタインは狭義での「比喩 (Gleichnis)」と呼んでいるように思われる。(英訳ならびに講義や講演における彼自身の訳でも simile と訳されている。これはふつう「直喩」と邦訳されるが、Gleichnis の例として挙げられている多くは単に「比喩」と訳す方がよいことを示している。)つまり狭義の比喩とは、比喩的でない表現にパラフレーズできるような表現である。「宗教における語りはまた比喩 (Gleichnis) ではない。なぜなら、さもないと人はそれを比喩でなく (in Prosa) 語ることもできねばならないのである。』(W.W.K. s. 117)。「しかし比喩 (simile) は何かの比喩でなければならぬ。そして、もしわたくしが比喩によってある事実を記述できるならば、わたくしはまた、比喩をやめて、それなしにその事実を記述できるのでなければならぬ (L.E. p. 10)。」ここでは、宗教や倫理学における多くの表現が一見すると比喩のように思えるが、実はそうではないこと、その理由としてそれらが通常の表現にパラフレーズできないことが述べられている。

比喩でない表現にパラフレーズできる比喩について、ヴァイトゲンシュタインはそれほど関心を示していない。つま

り、そうした比喩がパラフレーズされることで消滅してしまうような単なる逸脱にすぎず、言葉の文彩（あや）をもたらずにすぎないのかどうか、といったことを論じようとはしていない。これは、比喩とかレトリックといったことが殆ど顧みられない時代に彼がいたことを思えば当然とも言えるだろう。右のような考察をした時期の彼は、ある表現が比喩であるか否かということで、それが有意味な文か否かを示そうとしたわけであり、哲学的な分析ないし考察の道具としてそれを用いているにすぎない。比喩そのものについては多くを論じずに、哲学的分析に役立つかぎりにおいてそれに言及したり利用したりするという姿勢は、前後期を通じて一貫している。

「像 (Bild)」という語が、前期と後期では扱われ方がかなり変わっていることはよく知られている。「像」とは、きわめて多義的に用いられるが、大ざっぱに言って、種々のタイプの事象を概念的にせよ、知覚あるいは想像できる仕方までにせよ描き出したものと言うことができる。この像は意識して作ったり選んだりすることもあれば、否応なしにわれわれに迫ってくる場合もある。これら種々の像の中には、われわれの言語が至るところでもつ類似や比喩の外見に欺かれ、われわれに迫り、捕えてはなさないものがある。そしてそれが特に経験の全体に関係する像の場合に、いわゆる哲学的問題が生ずるのであり、その像の像たる身分を明らかにしていくのが治療的分析なのである。像の特徴は、あたかもそれが使用法をあらかじめ持つかのように思われるところにある (P.U. II-vii)。それが実際にいかなる使用法をもつか、本当は何を描き出しているのか、言語におけるいかなる形式、表現法がそうした像を生み出すのか、といったことを探求することが、ヴィトゲンシュタインの哲学的探求において重要な要素を占めている。像の使用法の探求の結果、すでに使用法の確立した像ないし表現にパラフレーズできないような像的表現がある。こうした表現は、さきに述べた狭義の比喩と区別される。「名というものは本来、単純なものを指し示していなければならぬ」とか「彼はわたくしの感じている痛みと同じ痛みを感じている」「太陽では今五時である」「見なれたものを見るとときには熟知の感じが

する「再認とは二つの印象の比較による」「ヘシニーベルト」という名は彼の顔と作品に適合している」等々。

こうした像のうちのあるものは全く適用をもたず、端的に無意味と呼ばれるべきであり、他のものは適用をもっていながら、すでに確立した表現を用いてパラフレーズできない。つまり一方は、そもそも有意義な表現に置きかえることが不可能なのに対し、他方は、置きかえるべき有意義な表現が確立していないがゆえにパラフレーズできないのである。「体験されるものとしての意味」という表現は、この後者にあたるのではないかと思われる。そうした表現の仕方について彼は次のように述べている。

「しかし、そのときには、われわれがこうした語体験のゲームにおいてまた意味(Bedeutung)とかへいみすること(Meinen)について語るのはいったいなぜなのか、という問題が残る。——これは別の種類の問題なのだ。——われわれがこうした状況でその表現を用いるということは、この言語ゲームに特有の現象なのである。すなわち、われわれはその語をこの意味で発したのであり、その表現をかの異なった言語ゲームから取ってきたのであると言えるだろう(PU. II-xi)。」

つまり、「体験としての意味・いみ」という表現をどうしても用いたくなる状況があるが、その表現はこの状況で用いるには本来ふさわしいものではない。それはもとの意味ではなく、この状況にふさわしかるべき意味で用いられている。それにもかかわらず、われわれはその表現をここでどうしても使いたいのであり、それでもって何事かを言いたいわしたつもりになっている。しかも、それをパラフレーズしようにも、すでに確立した言葉は他に見つからないのである。このような表現は通常の標準的用法を前提しつつ、そこから無意識的にはあれ逸脱しているのであり、<sup>(6)</sup> 狭義の比喩とは区別されるべきであるにしても、広義には比喩と呼んでさしつかえないだろう。

それでは、さきに挙げた「母音の色」の場合はどうだろうか。ヴァイトゲンシュタインは、これを狭義の比喩とも意味

体験の場合とも區別しているように思われる。「母音の色」と同様の扱いをつけている別の例を引用して、そのことを考えてみよう。

「へふとっている」へやせている」という二つの概念が与えられたとき、あなたはどちらかというとき水曜日かふとっている、火曜日がやせているとか、あるいはその反対のことを言いたくなるであろうか。(わたくしは前者のほうに決めたくなる。)では、ここでは、「ふとっている」と「やせている」に、それらの通常の意味とは違った意味があるのか。

——それらには違った使用法があるのである。——すると、わたくしはもともと別の語を用いるべきだったのだろうか。いや、明らかにそうではない。——わたくしはこれらの語を(自分の熟知している意味で)ここで使いたいのである (Pu. II-x)。」

「ふとっている」「やせている」という語は、通常の使用法から逸脱した仕方を用いられているが、他の非逸脱的な表現にパラフレーズすることはできない。それゆえ、狭義の比喩ではない。さらに、体験されるものとしての意味の場合のように、別の言語ゲームから表現だけを借用してきたのでもない。「ふとっている」「やせている」を、もともとの意味でここで使いたいのである。ここでの「ふとっている」「やせている」の意味は、ふつうの仕方では説明することはできない。

「母音の色」についても同様のこと言われる。こうした場合の「赤い」「青い」や、曜日の場合の「ふとっている」「やせている」は、「第二義の意味 (sekundäre Bedeutung)」で使われている、とヴァイトゲンシュタインは言う。もともとの、第一義の意味を知っている人だけが第二義の意味で用いることができる。「そのかぎりでは、ひとは第二義の意味を転義の意味 (übertragene Bedeutung. 英訳 metaphorical meaning) と呼びたくなるかもしれない (LW. I (198)) が両者は異なる。後者は、狭義の比喩と呼んできた比喩にこそふさわしいのである。

「第二義的な意味というのは〈転義的〉意味のことではない。わたくしが『母音eは自分にとって黄色である』と言うとき、わたくしは、〈黄色〉を転義の意味で言っているのではない。——というのは、わたくしは自分の言いたいことを、〈黄色〉という概念による以外には、全く表現できなかったであろうから (P. 113)。」

第二義の意味で語を用いる他の例としては、「暗算」における「(計)算」、また「電車ごっこ」における「電車」、「人形が痛がっている」の中の「痛がっている」等が挙げられる。いずれにおいても、それが通常の意味(用法)を前提していること、そして他の本来的な表現にパラフレーズできないこと、しかも表現のみの借用ではなく、その意味の説明がもともとの意味の説明にはかならない、という特徴をもっている。「転義の意味」との類似性の指摘が示すように、こうした表現も広いイミでの比喩的表現と呼ぶのが妥当であろう。すると、当面の問題と関係しており、ヴィトゲンシュタインが区別して用いたと思われる三つの比喩的表現がここで得られたわけである。(1)狭義の比喩 (Gleichnis)、これは転義の意味で用いられている。(2)「体験されるものとしての意味」という表現の属するような比喩、(3)第二義の意味で用いられた表現としての比喩。<sup>7)</sup>

以上の考察では「アスペクトの知覚」と「体験されるものとしての意味」との類似性を、比喩的表現という観点からとらえ、同時に比喩的表現としての相違として両者の相違をとらえてきた。まず類似点からさきに考えてみると、第一に、通常の標準的用法を前提した上での、それからの逸脱として比喩がとらえられているように、アスペクトを「見る」、ないし、として「見る」は、通常の熟知したものを「見る」を前提しており、体験としての「意味」は用法としての「意味」を前提しており、また、いみする (Meinen) 体験における「いみする」は、通常の使用法、例えば、「私は〈N〉で私の弟のことをいみする」、における「いみする」を前提しており、決してその逆ではないことがあげられ



る。ふつうに見ることのできる人のみがアスペクトを見ることができるのであって、アスペクト盲の人も日常の生活において殆どわれわれと変わりがないだろう、というヴィトゲンシュタインの主張もそのことと符合する。

巧みな比喩に出会うと、われわれは日常では気づかない何か深遠なことがらを意識するように思うことがある。熟知の地平が一瞬ゆらぎ、驚きとともに、日常熟知の言語を支えている根源的なものを、かい間みたように思う。確かに巧みな比喩は従来気がつかなかった新しい連関をわれわれに提示するが、しかしそれも通常の用法を前提した上でのことであり、比喩が適切でなければすぐに忘れさられるし、適切であれば今度は通常の用法へとそれは情性化していく。その点では、新しい技術の発見とその情性化・無意識化と事情は似ている。通常の仕方では言語を用いることは、言葉の適用規則に盲目的に、半ば自動的に従うことであり、比喩のもたらすような驚きは存在せず、思考の作用等は意識化されない。これがふつうに言葉を使うということの、ありのままの姿であろう。このレベルを越えて、これを支えている根源的なレベルの事柄を語ろうとすると、すでにわれわれは特定の像でもって世界を描写しているのであり、「こうである」ではなく「こうあらねばならない」と主張していることになる。

比喩をつくることは言語活動そのものを支えているわけではないにしろ、巧みな比喩は日常の地平の根源にあるものをわれわれに見せてくれると思える場合がある。それと同様に、意味体験やアスペクト知覚も、それ自身は熟知の地平の根底にあってそれを支えているものではないにしろ、日常の経験の基底をなす構造について、われわれに何かを教えるものではないのだろうか。「体験されるものとしての意味・いみ」という表現が用いられていること、「アスペクトを見る」という表現の用いられる状況があることは、そのことを示しているかのように思われる。「ここは寒い」という文を字義通りに用いる場合と、ここは暑いという意味で用いる場合とは何か違いを感じるはずである。「タケ(竹)」を十回続けて発音すると、もとの語感が消えてしまったようにふつう思われる。「タケ」と「ケタ」でアスペクト交代

さえ生ずる。また、反転図形の場合はもとより、判じ絵が解けて、木の枝が人間の顔に見えたり、二つの顔に今まで気づかなかった類似に突然気づいて驚いたり、人の表情の臆病さに突然に気づいたりする、といった体験は、日常的に言葉を使用したり、ものを見るときがどういふことなのかを、われわれに示唆するように思われる。熟知のレベルにおいてはふつう意識されないことに、それらは照明をあてると思われるのである。

問題なのは、その際に用いる表現が果たして適切なものなのか、また、適切な表現を使用できるような状況があるのか、という事である。そして、この点において意味体験とアスペクト知覚の問題の相違が浮き彫りになると思われる。その相違とは、さきの比喻の三種のうちの(2)と(3)の相違すでに述べられていたことでもある。つまり、(2)の場合は表現のみを別の言語ゲームから借用してきたのであるのに対して、(3)では、その表現はもともとの意味で、新しい状況において用いられているからである。

「体験されるものとしての意味・いみ」において使われている「意味」「いみ」という語が、もともとの意味と殆ど関係のないことは随所で述べられていることである(例えば、P.U. II-vi, R.P.P. II-245等)。ここで「意味・いみ」という語を用いることは、「錯覚」あるいは「盛気楼」と類比的に語られることがある。錯覚の中でも何か特定のあるものが他のものに見える(例えば、縄がへびに見える)というのではなく、全く表現しようのないものが何かに見える、という場合が類比物としてふさわしい。それゆえ「盛気楼」の方がよりの確な表現かもしれない。光と大気の特別な関係から眼に映じてくる盛気楼は、あたかも、言語にとり入れられている種々の比喻や、われわれを惑わすような形式の類似性、誤解への衝動を促すような言葉の外見から生ずる像のようである。そこには全く何もないわけではないが、日常用いる語彙中の特定の語句で名ざせるようなものはない。強いて言えば「独特の状況」があるのだが、その「独特の」という表現も何かを実質的に表わしているわけではなく、他の状況と何らか違いがある、ということを強調してい

るにすぎない。

見なれたものを見るとき或る特別の感じ、「赤」という語の浮かんでくる特別な仕方、意図的行為における或る特別な体験、といったことに関する「茶色本」での考察では、「特別な」とか「独特な」といった語に他動詞的用法と自動詞的用法とを区別する。前者は、更に具体的に述べたり説明したり、比較対照したりする前置きとして使われる。後者は強調の意味で使われる。そこでの例によると、「この石ケンには独特な匂いがある、われわれが子供の頃に使ったものだ」と言うときには、おそらく次に続く説明や比較対照の前置きとして使われている。他方、「この石ケンは独特な匂いだ」とか「ひどく独特な匂いがこれにはある」と言う場合には「普通でない」とか「印象的な」といった意味にすぎず、他との比較対照は問題になってない場合が多い。「茶色本」の考察している当の問題に関しては、「特別な」「独特な」は自動詞的に用いられている、とヴァイトゲンシュタインは主張する。つまり、その感じや体験それ自身を単に強調しているだけであり、他との比較対照を問題にしない用い方なのである(以上、BRB: II: 5)。すなわち「体験されるものとしての意味・いみ」とは、よく知られた言葉の使用において感じられると思える「独特の」感じに対して、すでに他の意味で用いている「意味・いみ」という表現を、本当は表現だけ借用してつくった表現なのであるが、その当の感じについては「独特の」といった自己強調的表現しか用いることができないので、他の表現法にパラフレーズすることができないのである。

そのことをさらに考えてみよう。まず、その感じ自体は確固たるものではない。つねに同じ語に同じような感じが伴うわけでもないし、種々の感じや感覚が互いにもつれあった仕方でも複合している場合もある。また、特に気をつけなければ全くそうした体験をもたない場合が殆どでもある。そして、以上に加えて、そうした感じは、 $\langle$ 痛み $\rangle$ や $\langle$ 憂鬱 $\rangle$  $\langle$ 怒り $\rangle$ 等のように振舞いとして特有のパターンをもっているわけでもなく、体験の表現形態としては、ただ当事者が

そのように語るといふことしかない。それゆえ、その感じが同じかどうか判定することも、他の種々の感じと比較対照することも殆ど不可能である。こうした状況であるから、その感じに適切にあてはまり、なおかつ他の感じとの区別もしうるような表現が使われなかったのである。使われなかった、ということは、その気になれば適当な表現をさがし出して使えたということではない。どこからか適当と思えるものを見つけてきてここで使ったとしても、その表現が他の諸概念に対してもとももっていった意味的な連関はここでは失われてしまい、単なる言葉だけの借用に終るといふことである。新しい表現を作りあげたとしても事情は同様であり、その新しい表現と他の諸表現との関係は未だ不明である。その表現は、いわば孤立しているのであり、自己強制的に「独特」な感じを表わしているにすぎないのである。

また、以上述べたことは、日常の言語使用における体験にではなく、「タケ」を十回繰り返し返したり「ヒ」で火をいみしたり碑をいみしたりするという非日常的な言語使用に関しても同様にあてはまる。意味（いみ）体験は、日常の会話や読書を成立させていると語るにはあまりに乏しい実質しかもっていないというばかりでなく、それ自身として（熟知の地平から切りはなして）とり出してきても、適切な表現を与えうるような確固たる内容をもっていない。それゆえ、それは日常の言語使用と殆ど何の関係ももっていないと言えるだろう。「体験されるものとしての意味・いみ」という表現を用いてなされる言語ゲームは、「意味」「いみ」をめぐる通常のゲームとは関係がなく、そのきわめて乏しい実質に依存してなされる、非常に制限されたゲームである。

「アスペクトを見る」をめぐる言語ゲームに関しては、事情が少し異なってくる。その表現が通常の場合の「見る」を前提しており、その逆でないことは既述のように、意味（いみ）体験の場合と同様であるが、逸脱の仕方に相違がある。

ここで「アスペクトを見る」ないし「とじて見る」という表現について、その用い方を限定しておくことにする。例

えば、街頭ですれちがう多くの人を見るといふのは、通常の場合には「アスペクト（人）を見る」ことでも「何かを人として見る」ことでもない。特に「として見る」に關して注意すべきことであるが、これを端的な知覚に關しては用いない、ということである。それ以前とは異なり『哲学探究』第二部でのヴィトゲンシュタインは、この用語法に厳格に従っている。端的に何かを見る際の、「何かとしてとらえる」類型把握と、アスペクトのひらめきや交代における特殊な体験とを明確に区別するためにそれはなされている。日常使いなれたフォークやナイフを見て「フォークやナイフとして見る」と言うのは殆ど意味をもたない。わたくしは、端的に「フォークやナイフを見る」のである。また、この場合にフォークやナイフのアスペクトを見ている（あるいはそれが見えている）でもない。

「として見る（見ていた）」「アスペクトを見る（見ていた）」という表現は、アスペクトのひらめきや変化、交代といたったことを体験している、ないし体験したことのある人のみを使うのにふさわしい表現である。「アスペクトは、その変化という現象を通じて初めて、見ることの他の側面から分離されるように思われる（RPP・I・15）」。それゆえ、ウサギーアヒルの反転図形でさえ、それを端的にウサギに見る人は「わたくしはそれをウサギとして見ている」とは言わないし、言うべきでもない。（ただし、それを反転図形と知っている別の人がその人の発言を聞いて「彼はそれをウサギとして見ている」と表現することは構わない。三人称の主語をとる「として見る」には、前述の制約が適用されないからである。）また、フォークをいつも見なれている人は、フォークをフォークとして見ているのではなく、フォークとして扱ったり、みなしている、と言うことができるだろう。いずれにせよ、アスペクトの変化やひらめきを体験してはじめて、もともとそこにあつたはずのアスペクトが「見えて」くるのである。そうしたことは、フォークやナイフとは多少事情が異なるが、判じ絵の場合を例にするとわかりやすいかもしれない。木の枝と葉しか見えなかったところに突然、人の顔が隠されていることをわたくしが発見するとき、「その絵を人の顔として見ている」と言うことができ、

## アスペクト再考

アスペクトとしての人の顔が一種の驚きを伴って意識され眼前にありありと見える。しかし、それ以前からそこにあったはずの人の顔は今まで見えていなかったのである。

それでは「アスペクトを見る」ないし「として見る」という表現は、通常の「見る」に対して、いかなる種類の逸脱をしているのであろうか。それは、前掲の三種の逸脱のうちの(3)に当たると思われる。もし(1)であれば、それらは別の表現にパラフレーズされるはずである。こうした脈絡の中で、「として見る」とは「解釈する」ことなのではないか、という問題が論じられているように思われる。ヴァイトゲンシュタインは、解釈ではないという方に傾いている。「解釈することは考えること、何かをすることであるのに対し、見ることは一つの状態である (P. 112)」からであるが、アスペクトのひらめきは半ば視覚体験、半ば思考であるとも述べられるように、解釈とアスペクト視の関係を断絶することはできない。解釈するとは、偽と証明されるかもしれない仮説を立てることであるのに対して、「わたくしはこの図形を……として見ている」ということは「わたくしは明るい赤色を見ている」と同じく殆ど（あるいは同様のイミでしか）検証できないという理由から、**「解釈する」**へのパラフレーズは否定されるが、結びつきがなくなったわけではない。こうして、通常の「見る」と「解釈する」、「知っている」、「みなす」、「理解する」、「想像する」等の文法上の相違が種々の仕方で見られることで「見る」という概念の輪郭が次第に型どられていくとともに、「として見る」と「見る」の類似性も指摘され、「として見る」をパラフレーズする試みが否定されることになる。

ところが、たびたび言うように「として見る」には「見る」にとつては疎遠である諸概念——考える、驚く、注意する、意志に従う、想像する等との類似性もあるので、両者を同じ概念と考えることもできない。「として見る」は「見る」にパラフレーズもできないのである。ここには多くの概念が交叉していると言わねばならない。しかし、両者に類似点の存在することから、(2)のように単なる表現の借用であると規定してしまうわけにもいかなくなる。「として見る」

と「見る」との間には、どうしても同じ「見る」を用いざるをえない様な結びつきがあるように思えるのである。

さらに、「として見る」体験はその実質において、意味体験の場合よりもほるかに確固たる規定を受け入れるものであると言える。ウサギアヒルの反転図形を見て「わたくしは今ウサギを見ている」と言うとき、その体験の外的表現として特有のパターンをもった振舞いは（そのように語ること以外に）存在しないが、その体験は単に「独特のもの」であるわけではない。つまり「ウサギ」という言葉が、他の諸概念との関連を保持したまま使われているのである。「ウサギ」と言うとき「アヒル」や他の動物との比較対照が含意されているし、実物のウサギ、ウサギの絵、ウサギの模倣、といったこととの関連もそこに含まれている。

「ウサギとして見ている」と「アヒルとして見ている」における相違は「この印象」「あの印象」の相違よりもほるかに正確に規定されている。「として見る」体験は、単なる印象の相違ではなく、概念上の相違を受け入れうるのである。言いかえれば、その体験は、自己強調的でない仕方で記述されるものである。そのような性格の体験であるから、疑気様や錯覚と類似したものとみなすわけにはいかないだろう。すなわち、(2)の種類の逸脱と考えることはできないだろう。

それでも、「として見る」あるいは「アスペクトを見る」ではなく、「見る」を用いない新しい表現を使ってもよさそうなものなのに、どうしてそのようにしないのかという疑問が生ずるかもしれない。通常の用法を逸脱してまで、なぜそのような体験に「見る」を使うのであろうか。この問いは、「暗算」においてなぜ「(計)算」が用いられているのか、「電車ごっこ」で「電車」がなぜ用いられているのか、といった問いと同様のものである。それらには、前者の表現は後者の表現の理解を前提しており、「また」、「(計)算」「電車」の意味は、「計算」「電車」によってしか説明できないから、と答えるだけでは十分ではないだろう。そもそも別の表現ではなく「暗算」という表現がなぜここで用いられ

## アスペクト再考

ているのか、という問題に対する答えは未だ与えられていないのである。それに対する回答は、音でさえ見えると言っている場合がある、という過激な例を挙げることで与えられるように思われる。母音の色を語る場合、そう語ることを正当化する理由は何もない。ただそのように語りたいし、そう語る以外に表現のしようがないのである。大事なことは、そのように用いている理由を問うことではなく、用いられた表現が逸脱しているのか、しているとすればいかなる逸脱の仕方をしていのかを問うことであろう。

以上のように、「として見る」は「見る」と同一でもなければ全く異なる概念でもない。また、「解釈する」その他にパラフレーズされることもない。このような曖昧な性格を少しばかり明確にするのに、(3)の仕方での逸脱、すなわち、その表現は第二義的意味で用いられている、という規定が役に立つように思われる。それと同時に「意味(いみ)体験」の場合との類似と相違も、ある程度理解できるようになったと思われる。

最後に、アスペクトの知覚という体験が日常熟知の地平の奥深くにあるものを垣間見せるものなのかどうか、ということについて少し考えてみる。これは、通常の知覚がアスペクトと関係をもっているかどうかにかかっているが、それが殆どの場合に「あるアスペクトのもとの知覚」であるかぎりにおいて、それには肯定的に答えることができるだろう。われわれはそうしばしばアスペクトを知覚するわけではないが、日常的知覚は一般にアスペクトを伴っている。日常熟知の地平にとって、アスペクトの知覚は必要なくても、アスペクトの存在は必要不可欠なのである。これは単に知覚の領域にとどまらず、言語の領域にまで関わることである。それも、線の組みあわせや音を言葉として知覚することだけでなく、文の「理解」ということについてもアスペクトの存在が必要だと思われるのである。文の理解と音楽の理解との類似をヴィトゲンシュタインはしばしば口にしているが、そこで言わんとしていることもそういうことであるように思われる。こうした事柄の詳細な考察は、アスペクトの知覚と体験されるものとしての意味との類似と相違を、比喩と



は別の観点から照らし出すと思われるが、それは本稿の範囲外のことである。

註

(1) *bildlich* の英訳はここでは *figuratively* であり「比喩的」と訳すのがふつうであろうが、引用文でもすぐに *Bild* が続いているように「像」との関連は切りはなせなうと思ふ。*picturesque* と訳されることもあり (ex. RPP, I-1061, 1062) この方が適當なのではなからうか。それは、像 (*picture*) との関係を残しつつ、しかも標準的用法からの逸脱も含む表現だからである。こうした訳語上の問題に言及したのは、以下の考察にそれが影響を及ぼすからである。

(2) 「母音の *e* はわたくしにとっては黄色だ」における「黄色だ」が *bildlich* に用いられているかに関して、イエス (RPP, I-1062) と言われたりノー (LW, I-799) と言われたりする。本稿では「ノー」にのみ着目したが未整理であり不十分な表現が草稿にはつきものなので、どうしても「解釈」が必要になると思われる。また、「母音の色」の例と意味体験との相違を本稿では主張するのであるが、それらが類似していると述べているように思われる箇所もいくつかある (RPP, I-328, II-574, LW, I-59, 362, 等) という点も、公正を期すために指摘しておこう。

(3) 「逸脱している」とは、言葉をかえれば、規則に従っていないということであり、そう用いることを規則に基づいて正当化できない、ということである。それゆえ「なぜそのような表現を用いるのか」という問いに対しては、規則を参照しての正当化や理由づけを与えることはできず、強いて答えるとなると、連想とか、前史として原因に言及することになる。また、比喩における逸脱は単なる規則違反とは異なり無意味とはみなされないが、無意味とされるかどうかは状況に依存している。但し、普通の会話や書物の中では、それらは意味ある規則違反として理解されがちである。無意味なことを相手は語ることがないという了解があるからである。

(4) 例えば『哲学探究』第一部二三節。注目すべきなのは、そうしたことの、いわばモデルとして数学における諸変化がそこで言及されていることである。数学とアスペクト視の密接な関係については数学について述べている多くの箇所で見られる。比喩とアスペクト視の両者に共通する、ある種の「創造性」をそこに見ることができらる。

(5) 比喩は適用もたない像をつくるようにわれわれを誘惑することのある反面、われわれの素朴な見方を変えるという効用ももっており、ヴァイトゲンシュタインもそれを積極的に活用する (cf. WL, II, p. 50)。

(6) なぜそのように言うことができるのか、ということとは「意味」という語の意味の考察によるのであり、それは『哲学探究』のメインテーマの一つであった。本稿では「語の意味とはその用法である」という主張を前提として話している。その他にも多くの主張を、検討することなしに前提しているが、ここで少しその点について述べておこうと思う。ヴァイトゲンシュタインが「比喩」と標準的用法という区別を、直接そのまま用いるにせよ、いくつかの例を挙げるさいに間接的に用いるにせよ、哲学的探究の

アスペクト再考

一つの手段として利用したことは確かである。しかし、そうした手段を用いることは問題となつてゐる事柄そのものの考察のためというよりも、そのような諸考察の後でなされ、それらを展望する一つの視点を与えるためであつたと思われる。主として『哲学探究』第一部よりも後にそうした区別が利用されていることもそれを示しているだろう。この論文でも目的とされているのは、諸考察の検討ではなく、それらのうちの幾つかに關する展望を得ることであることから、重要な主張であつても殆ど検討せず前提する、という方法をとつてゐるのである。

(7) ヴァトケンシュタインは Metapher (metaphor), Vergleich (comparison), Analogie (analogy) といった語も用いてゐるが、本稿では当面の目的に必要な三種の比喩的表現を区別するだけにとどめる。

(8) 知覚、言語活動の場面のみならず、行為についても同様のことと言えるように思われる。行為に先立つものとして意識された意図や意志、選択や努力なども、比喩との類比のもとで理解されるだろう。

(9) 繩をへびと見誤り、あとで人から教えてもらつてそのことに気づくようなときにも「自分はあるのとき繩をへびとして見ていたのだ」と言う場合があるが、この場合にもアスペクト変化を見る必要はない。これは、人の反応や行動を説明し合理化する脈絡で、いわば第三者の立場で用いられており、いま考察されている脈絡とは異なり、やはり前述の制約は適用されない。

(10) 意味体験、アスペクトの知覚の相連を知覚に關する比喩でもって語れば、嚴気楼とアスペクト視との相違として表わすことができらう。すると両者の類似点は、ともに通常の知覚から乖離してゐる、という点に存することにならう。

略語表

- WWK. Ludwig Wittgenstein und der Wiener Kreis  
 LE. A Lecture on Ethics (Philosophical Review, vol. 74, 1965)  
 WL, II. Wittgenstein's Lectures, Cambridge, 1932-1935  
 BRB. The Brown Book  
 PU. Philosophische Untersuchungen  
 RPP, I, II. Remarks on the Philosophy of Psychology vol. I, II  
 LW, I. Last Writings on the Philosophy of Psychology vol. I